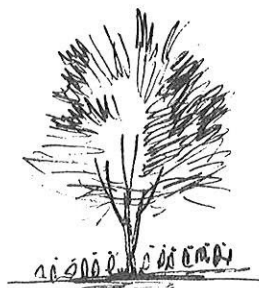


光の子



No.109 2004. 7. 1

●今年の聖句 悪をもって悪に、侮辱をもって侮辱に報いてはなりません。かえって祝福を祈りなさい。(ペテロの手紙Ⅰ：3：9)



「図書館で」

挿絵・中島英子

暑中お見舞い申し上げます
みな様のお支えお励ましにお応えできる養育を
心して参ります

気候不順の折お大事にお励み下さいますように
社会福祉法人 光の子どもの家

「水のおと」

苗代の寒さへ通ふ水のおと

八十八夜納戸を風の吹き抜けて

野地蔵のくるぶし埋めて竹落葉

沖島のいちにちけぶる袋掛

代掻きの足うら真白に寝まりけり

花みかん夜は波音にくるまって

仏飯に湯気のひとすじ緑さす

黛 執 (『春野』主宰)



謝

感

男 哲 原 菅 施設長



社会福祉事業、それも民間のそれを語る時、ボランティアズムを避けては語れない。児童養護施設光の子どもの家もその例外ではない。

一九八三年六月、社会福祉法人光の子どもの家設立準備会を立ち上げた。そこには、原田史郎・福島勲両牧師、田中春女・竹花曉両開業医師、仙道富士郎山形大学学長、梅沢三保加須市長夫人、高瀬美武三愛学園理事長、今関公雄青山学院短期大学教授など錚々たる人々が結集した。月に数回、または数ヶ月に一度と必要に応じアトラダムな会合に集まり、光の子どもの家設立の準備のための作業を確認しながら審議し設立の日までの二年間を文字通りボランティアで関わって下さった。私は役員でなくても出来るだけのことはするから、と固辞された梅沢氏以外はそのまま初代の理事、監事などの役員をお引き受け下さり、それもまた無報酬なのである。その準備に当たった事務局は三島市非常勤保育士となった竹花信恵、田中郁夫は児童養護施設指導員を続け、私は運送会社で運転手をしながら共に携わった。

もし設立が実現したら真っ先に駆けつけよう、もう一度専門学校で学び直し、保育園ではたらきながら待っていた二桁に近い若い人々もいた。その中に今も仲間である倉沢智子、鎌田洋子や最初の職員として加わった岩崎まり子、池田祐子

などがボランティアズのありようを堅持してきている。

開設当初の異様なほどの地域の反対のつぼの中で、全国から寄せられたお励ましやお支えは、光の子どもの家の二〇年を可能にし、こんな時代になっても小紙の読者八〇〇〇余名に脈々とつながっている。

社会福祉などは物好きか、裕福で奇矯な者のすること、とても食べていくことなど出来ない時代がほんの三〇年ぐらい前まで当然だった。

一九七〇年代以降目を眩るように社会福祉関連事業は整備された。

しかし、どんなに条件や公的な制度などが整備されても、弱い、困難な条件に陥っている人間に対応するには充分というとはなく、逆に、それ以前にあった「人として」の温かさや共同意識が真空化していくことになることさえある。

この六月五日、「第十回光の子どもの家定員外職員確保のためのバザー」を行った。

これは、日本経済が一九九〇年代のバブル崩壊から転落するように不況に陥った頃、光の子どもの家への一般寄付者が激減し、設立以来お励ましたいたで実現してきた数名の定員外職員の確保が困難になったのである。

それまで職員給与は据え置いたまま数年間を過ごしてもいた。新任職員と前年、

その前の職員との間に給与の差がなくなってしまうほどだったのである。ここで、職員数を減らすか、自分たちで何とかお金をつくるかを迫られたのであった。

職員たちは、施設つぼくて嫌だけどバザーをしようか、と提案した。

加須市のしずくの会が数カ所の大きなバザーを数十年も手がけてきていたのでノウハウを教えてもらいに伺うと、一緒にやろう、と言って下さった。それに呼応するように後援会も積極的に参加して下さった。

まず、自分たちに出来ることをしようという職員たちの熱意が原点となって十回も続いてきたのである。

今回は青山学院大学キリスト教学生会、聖学院大学から七〇名を超える学生たちが駆けつけて盛会裡に終わった。

学生たちも、お年を召したしずくの会、後援会の方々も、自分の出来ることをした、という満足感で顔を輝かしながら帰って行かれた。ありがとう、と感謝さえしながら。

取材に入っているアジアプレスの刀川カメラマンが、「これは一体何事ですか。自分の時間と交通費などを使い一生懸命働いて、嬉しそうに『ありがとう』と言って喜んで帰って行く。こんな光景を見たことがない。」と言われていた。

2つの文化に生きる 43

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京 子

年の始めに日本全国で交わされる年賀状の山を私は数年前から本当にこれは意味のあることなのだろうかと疑問に思ってきた。中でも住所書きも内容もすべて印刷で、なにも個人的なメッセージのないものは、なにか空しいものだ。そこで私は数年前から年賀状はいただいた人にだけ、手書きで返事を書くことにしている。そして、なぜか年毎にその数もだんだん減ってきている。私がいた数少ない年賀状の中で毎年必ずくださる友達がいる。彼女とはお互いにアメリカ留学する前に出会い、留学中もアメリカで何度か会った仲である。その後、それぞれが帰国し、お互いにそれぞれの家庭を持ち、

ここ十年以上は全く会わず、ただ年賀状だけの決まり文句のあいさつで毎々が過ぎていた。今年も彼女からの年賀状にはかわいい愛犬の写真ときれいなワープロ仕上げの印刷のすみに、手書きでいつものきまり文句の「または是非お会いしたいですね。」と書かれていた。私は又、いつものように「ほんとお会いしたいですね。」と返事を書き、今年は私のEメールアドレスを書き加え、「良かったらメールください。」と付け加えた。

話はここから始まるのだ。なんと数日後に彼女からメールが届いた。手紙と違ってEメールだからなり気楽に敏速にお互いの近況が伝えられる。何度かやりとりをした後、彼女から仕事のお誘いがあった。それは彼女の働いているカウンスリングの事務所で仕事をしてみないかという誘いだった。カウンスリングなんて、と始めは、しり込みしていた私だが異文化間で生活している人たちの手助けということを知って私にできることがあればと四月から週一回のペーシングで渋谷まで出かけて行くことになった。そこで働いている女性たちはなんらかの形で海外生活の経験があり、異文化を肌で経験した

人ばかりである。そして相談の対象者は主に海外に支社をもっている会社の家族、学校関係、個人などである。初めて海外に住まなければならぬ家族にとつて、その不安はかなりのものがある。食べ物は大丈夫だろうか。言葉は通じるだろうか。子どもが病気になったらどうしよう等等。そして、何よりも今まで日本にいる外国の人たちを外人さんなどと呼んでいた立場から今度は自分たち自身がその外国の外人さんになるのだからそのカルチャーショックといったら相当なものである。又、始めは海外生活に慣れることが課題だが、実はその後の帰国後の生活がそれ以上のカルチャーショックを受けることになることにはあまり気がつかない。特に子どもたちが一番の被害である。日本に帰ってきてから日本の学校になじまなければならぬ。がんばろうとすればするほど空回りしてしまう。登校拒否、ひきこもり、拒食症、過食症などさまざまな症状がでる。開き直ってインターナショナルスクールに入れてみるが今度はその子のアイデンティティーの問題が浮かび上がる。自分は日本人なのか、何人なのかである。

私たち夫婦は6年程前に子どもたちを日本の学校からアメリカンスクールに転校させたのだが、我が家ではそれはいたって自然なことだった。母親が日本人、父親がアメリカ人なのだから両方の教育を受けるのは当たり前のこと。子どもたちもそれなりにバイリンガル、バイカルチャルをうまく取り入れ、今、自分なりのアイデンティティーを築き上げようとしている。

けれども日本において私たちのような家族はほんの一握りである。海外でさまざまな異文化体験をしてくる家族は、夫婦が日本人ということで形上、日本の家族、日本の文化にまた逆戻りするという逆の異文化体験をすることになる。

人生80年だとしたら、その折り返し点をすでにまわり、最近、違った形で人の役に立ちたいと思っていた私にとつて、この仕事はとても新鮮でやりがいがある。ものごとを違った目線から見ることが出来る。カウンスリングといってもまだまだ電話の対応などうまくできないが、自分の間、週一回のペースで渋谷に通おうと思っている。

最近、憂鬱な事があまりにも多いと思いませんか。なにをどう話したらいいのかわからないほど、信じられないようなことが次々に起こってくる様を見ていると、「二

学者もどきのつぶやき ⑦

「ゆゆしき事ども」

山形 仙道 富士郎
学大 長 仙道 富士郎
形学 大長 仙道 富士郎

一世紀はやはり暗い世紀になつていくのかな」と予想せざるを得ないような気がいたします。「出口なし」とはこんな状況をいうのではないでしようか。

そもそものは、やはりアメリカが大義のないうイラク戦争を始めたことにあると思います。捕虜の虐待は、怒りに猛り狂つた人たちの常軌を逸した行為であり、許されるものでないことは論を待ちませんが、第二次世界大戦における日本兵の行動にも見られたように、戦争という正常な感覚が奪

まい、すみません。それにしても、イラクのことだけでなく、世の中はゆゆしい事だらけで、その日その日によって憂鬱になったり、逆に興奮して腹をたてたりしています。

最近、もつとも腹立たしい出来事は、政治家の国民年金未納問題です。官房長官が未納問題で辞任をしたというニュースをテレビで見たのは、酒を飲んで家に帰って来たときでした。朦朧とした頭で私は一瞬「政治的駆け引きだ」と感じました。「くだらない。」と吐き捨てるように言つたと思います。聞いていた妻が怪訝な顔をするので、これから起こるだろう事の予想を話しました。その後あまりにも正確に予想は当たつて、民主党の代表は辞任しました。そして、つぎの新しい代表が決まったのに、彼も年金未納の責任をとつて辞任し、もう一人の次期代表候補になつていた人が、最終的には民主党の代表になりました。最初代表候補になつていた人は、政界きつての業師だということは皆さんもよく知つていると思いますが、彼が代表を引き受けた時点で、自分の年金未納の事実を知らなかったと思ひますか。そんなことはあり得

ないわけで、最初から最終的に決まつた人に導くための儀式だったと見ますが、間違っているでしょうか。こんな茶番をやっているようでは、民主党も永遠の野党で終わると思います。

だいたい、うっかりミスで年金を払わなかったことが、職を辞さなければならぬような事なのではないでしょうか。そうではなくて、国会議員でもそんなミスをしてしまふ程に、年金制度は不備であるのだということを、国会議員全員揃つて国民に訴え、これからそうならないような道を国民に提示するのが筋だと思ふのですが間違っていますか。

私の知るかぎり、いま申し上げたような論調を展開している新聞は一つもないようです。うっかりした事を言つて世論を敵に回すのが恐ろしいのです。恰好だけつけて、内容のない世界がだんだん広がつて行つていふような気がしてなりません。

そして、私の脳裏に影絵として焼き付いているのは、我が国が第二次世界大戦に突っ込んでいくときに、それを扇動した朝日新聞や、東京日日新聞の報道なのです。

エッセイ

五月の日記から

一日の用事を済ませて、夜、寝る前に日記を書く習慣が、もう長く続いている。

用事を済ませてと書いてしまったが、実は大抵の場合、済んではないなが時間切れとなつて、というのが正しいようである。

いずれにしても、風呂から上がつて（時には風呂に入るのが億劫で入らず）日記帳を台所の食卓の上に置くと、やつと自分の時間というような感じになつて、何か書きつけているのである。

別に義務感はなく、単なる習慣と惰性によつて書いているだけの事だから、その内容たるや、ろくなものではない。したがって、私の日記は「二人の人間が生きた証である」などとは、とても言えるしろものではない。

とはいえ「Tさんからダンゴをもらつたのはいつだったかな」という時に日記を開いてみて、「あ、何月何日だった、あの時はダンゴを十本ももらつたんだ。じゃあ今度会う時にはダンゴでも、いやセンベイでも持つて行こうかな」といった程度の利

彫刻家 中島 睦雄

用価値はあることはあるのである。五月は私にとって大変忙しい月である。

○五月一日（土）の記録

S会搬入準備のため美術館へ。会計のSさんと二人で受け入れの設営（S会の事務局をやっている私は、搬入と展示に必要な物品、書類を搬入前日に、美術館地下三階の搬入室に運び込んでおくわけである。テーブルや椅子を並べ、貼り紙を出し、翌日の十時に各係がすぐに作業ができるようにしておかなければならない）

○五月二日（日）

九時四十五分頃美術館に着くと、搬入の係の人がもう動いている。各地から順調に作品が搬入される。心配していた福岡のTさんの作品も入つた。

○五月三日（月）

搬入二日目、作品の数も二百点を越えている。夕方家に帰ると、長崎のYさんの作品が家に届いていた。書類上の手続きは済ませたから、八日の陳列の日に車で運ぶことにする。○五月四日（火）少し寝過ごしてしまい、朝食をと

らずに美術館へ。八時四十五分、守衛室に声をかけて入る。今日は第一次鑑査（入選落選を決める）運営委員会、陳列係は展示計画を一室々四室まで紙の上で作る。疲れて帰る。十一時半まで、展示会の会場当番表を作る。

※展示計画について。第一室から四室まで搬入された作品をどこに展示するか、係が決める。「おれの作品はここにしてくれ」というような事は許されない。

○五月五日（火）

九時四十五分頃美術館へ。展示、写真、審査の係の仕事が進む。夕方疲れて帰る。

○五月八日（土）

八時四十五分、美術館に入る。会計のSさんが来る。京都からのMさんが来る。Mさんは昨晩泊まつたらしい。五十三回展の陳列の日、最終審査の日、明日の開会を待つだけ。疲れた。

○五月九日（日）

展覧会初日、何やかや大変。印刷関係のミスが見つかる。校正をした事務局のミス。出版関係の人が来る。T社、B社、A社他。一日中右往左往。帰ってから広告主への目録発送の送り状作り。十一時五十三分。

こんなことで、てんやわんやの五月がスタートした。これは毎年のこととで、私にとってはゴールデンウィークというのは全く関係ない。これが数十年続いている。家族も初めからアテにはしていない。

特に事務局の担当としては、会期中可能な限り美術館に詰めていなくてはならないので、当番表には入れておかない事になっている。

しかも今年は、搬出の終わる二十日までの間に、三つの展覧会が重なつてしまった。東京駅近くの画廊でやっている絵のグループ展は、今回三十回展だが、創立から休まず出品しているし、埼玉県展もダブっている。

○五月二十日（水）

やれやれ搬出もすべて終わった。台風二号とやらで、夜、雨がひどくなる。それにしてもこんな生活で良いのだろうか。来る日も来る日も無我夢中。決して良いわけではない。十二時四十分になる。寝よう。

五月の日記の一部がこれである。つくづくこんな生活で良いのだろうかと思う。決して良いわけではない。バカジャナカカ。



光の中で

佐藤家

今年の二月、白鳥勇気君が仲間に加わりました。今回はとっても可愛い勇気君の紹介をさせていただきます。三月に二歳の誕生日を迎えた勇気君は、アンパンマンが大好き。と言うか、自分がアンパンマンだと思っているようです。ブロッコリー、人参、大根、コーンが大好物。菜食主義なのですが、最近お腹周りやお顔の肉付きがよく、日を追うごとに首がなくなってきました。自分がよくなくなってきました。自分でも気になるのか、抱っこされていても「重いよ！重いよ！」と愚図ることがしばしばです。健康のためにも(?)砂場や公園で元氣一杯に遊んでいます。サラサラヘヤーがとてもお似合いで、上品な香りが漂っていて、「担当者につくろ。」とよく言われていたのですが、先日散髪をして涼しげな坊主頭になってから行動もダイナミックになってしまいました。教育テレビに出てくる「ヤンチャルモンチャ」のように

なっていました。

何でも自分でやりましたが(失敗することもありますが)、お箸を使えるようになったり、ズボンやオムツを自分で脱げるようになったりと出来ることが増えてきました。特に上手なのが、毎回笑いと感じ動を与えてくれる、食前の「お祈り」と食後の『ごちそうさまでした』です。実際みなさんにお見せできないのが残念です。

そんなマイペースで癒し系の勇気君は子ども達にも大人にも愛され、のびのびと生活しています。勇気君が来てくれたおかげで、子ども達が元々持っている優しさや笑顔が今までよりも多く表現され、そのことで助けられている毎日です。

服部 沙絵子

河のほとり

倉澤家

先日母の日、担当の子どもたちが母の日の夕食会の準備をしてくれた。

卒園した亜紀と沙慧が、部活で忙しい高校生をカバーし、プレゼントの調達やカード作り、夕食の準備を進めてくれた。傍にいと、ついつい口出ししてしまう担当者に、「今日出かけてもいいよ。」と言ってくれたが、前日に外出してしまい、体力もお金も無かった担当者は自分の部屋でジツとしていたことにした。担当者が部屋で横になっている間に、クリームシチュー、チャーハン、水菜サラダ、チーズケーキが用意され、食卓に並んだ。どれも美味しかった。

倉澤家の子どもたちは、未だに母の顔を知らない者、幼い頃に別れたままの者、病気で母を亡くした者、つい最近母を失った者：など母親との関係の希薄な者が多い。しかし、どの子どもにも産んでくれた母は存在する。その母にたとえ今はそう思えなくても、母の顔

を知らなくても、いつか「産んでくれてありがとう。」と感謝できる

為に、そして子どもたち自身が母親になった時に、自分の子どもから「産んでくれてありがとう。」と感謝される為に、今の担当者の働きが活かされればと思っている。担当者としての働きを再確認させられた一日であった。

倉澤 智子

あかり窓

心理室から

蛙の合唱がにぎやかな季節になりました。皆様いかがお過ごしでしょうか？

まだ二歳にもならない葵ちゃんが入所して三ヶ月が経ちます。はじめこそ気むずかしい表情で担当者にしがみついていた葵ちゃんでしたが、今では目が合うとニコリとしてこちらの気持ちを和ませてくれる癒し系です。その葵ちゃんのお一人のお気に入り、どちらかというと子ども達に恐れられている菅原施設長です。葵ちゃんはずか施設長のことを「アカ Cheney」と呼びます。情熱的な施設長ですので、赤いオーラでも葵ちゃんには見えているのでしようか、その呼び名の由来は今もって解明されていませんが、葵ちゃんが「アカ Cheney」と呼ぶと、普段は厳しく自らの姿勢を私達に説いて下さる施設長がくしゃくしゃに相手を崩し、好々爺といった様相になってしまいます。それは通りすがりの私をホッとさせたのかな光景で、こんな優しい生活がこの子に続いていけばいいなと願った一瞬でした。

積 みどり

子どもたちの季節

仙道家

新しい環境にもそれぞれ少しずつ慣れ、生活のリズムが整いつつある仙道家の子ども達ですが、相変わらず一時も目を離すことの出来ない最年少の弥沢と美歩をはじめとする、元氣な子ども達に振り回される毎日です。

そんな仙道家の夕食は、他とは少し違う雰囲気の流れです。出来る限りダイニングの照明を落とし、各テーブルに小さなろうそくを二つずつ置き、食事をとりま。隣のテーブルの様子が何とか

原田家日記

小西 剛史

玄関に入ると、私のスリッパを両手で抱えニコニコと出迎えてくれる人がある。いくつになっても玄関で出迎えられるというのは嬉しいものである。その「人」というのは、私のグループにやってきた2歳の女の子である。

初めてここにやってきた時は、泣いてばかりの毎日抱っこなしではどこにも行けない、お淑やか(?)な子であった。しかし今では目を離すと障子に穴を開けたり、

季節のおとずれ

市川家

新学期が始まりあつという間に二ヶ月が経とうとしています。皆様いかがお過ごしですか？

地域の家に移った事で、幼稚園のお母さん方と会う機会が増え、また要、美也子がお友達の家で遊びたいという事が多くなりました。

つい先日要、美也子をお友達の家に送っていき、私もそのままお邪魔させていただき、子どもだけでなく私まで楽しい時間を過ごさせて頂きました。他のお友達のお母さんもみえていて、「お家はどこなの?」というたわいもない話から、上のお子さんが光の子どもの家をもう卒園した子どもと同級生だったなどの話も聞きました。

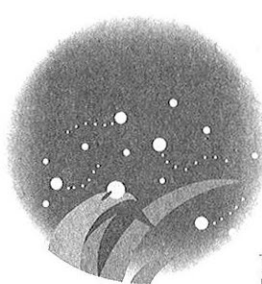
美也子はすぐにお友達と遊んでいたのですが、要はなかなか離れず、帰りにやっと仲間に入れていました。送っただけでは子ども

達の様子を見る事ができないので、お母さん方と話しながら子どもの様子を見て新鮮でした。

五月晴れの日に幼稚園の遠足に行ってきました。要の仲良しの女の子のお母さん達と今回は一緒に行動しました。サマーボブスレーを皆でやりに行ったのですが、定員が二名ということで、私達はあきらめようと思っていた所、ひとりのお母さんが自分のお子さんと滑った後、わざわざもう一度上がって下さり、美也子と滑ってくださいました。感謝。要も美也子もとても嬉しそうでした。

沢山のお母さん達に助けていただき、双子の要、美也子は毎日楽しい時間を過ごさせて頂いていると強く感じる今日この頃です。子ども達ができるだけまっすぐに育つように、お母さん方、地域の方々と協力し合い、また子どもと共に感謝しながら毎日笑顔で生活できたらと思います。

市川 美穂



現場から

続・光の子らしく

⑫

岩崎 まり子

空にはひばりがせわしくなく羽ばたきながら歌い、緑も日増しに色濃くなってきました。田植えも終わり、何だか目の前に繰り広げられる世界はとても躍動的です。

新しい年度が始まって1ヵ月余、緊張の糸もほぐれ、疲れも出る頃です。

皆様、いかがお過ごしですか。

先日、丘実ちゃんのおばあさまがケースワーカーに伴われて来訪して下さいました。入所前の2週間、丘実ちゃんの生活をみていて下さった方です。以前、お宅へ伺い丘実ちゃんの写真をお渡ししたことがありましたが、そのときと同様、今回もおばあさまは丘実ちゃんに会うと目頭

を押さえて再会を喜んで下さいました。

丘実ちゃんとは言えば、一瞬緊張した面持ちになったもののすぐにお土産を見つけ、「あれ、何だろうこれ。」と箱を覗き、手を入れようと、私はその一連の言動に思わず眉をひそめてしまいました。菅原施設長にもたしなめられてもシュンとなるどころか、あちらの椅子、こちらの椅子と飛び回るわ、ベラベラと喋りまくるわ。お土産のことも当然気にな

っているの「あー、お土産何かない」と、あさつての方を向きながら言っていたりしました。



くないの」と、何も気にせず手ぶらで遊びに来て下さるよう協力を求めました。丘実ちゃんからはガム等お菓子の他、携帯電話の催促もあつたという話も伺い、ひたすら謝罪しました。一瞬、私自身の働きの未熟さを棚に上げて「全く：！」と思っ

です。人の愛情なんて、善意なんて信じられるでしょうか。目に見えないものを尊ぶような心のベースは、そういうもので潮れるくらい与え続けられなければ実感できないものだろうと思います。目に見える「物」を催促し、目賢く物を見つけ手に入るけれど、本当に欲しい物ではないのでしよう。大事にできず、すぐ放り出してしまふのです。自分が何を欲しがっているのかわからないことさえわからない丘実ちゃんは、実はとても虚しい思いをしているのだらうと改めて思われます。自分が本当に欲しいものが何かわかったとき、丘実ちゃんは幸せなのでしょう。指吸いをしてながら眠りに就く丘実ちゃんは、まるで赤ちゃんのような表情で。赤ちゃんのときに出

会えていたら：「そんなどうしようもないことを考えてしまう夜もありますが、今できることをやっています。愛を欲して育てられながら与えられるものの少ない自分の小ささを子どもに託しながら：」

明日は幼稚園の遠足です。「丘実ちゃんの行きたいところに行くだよね」と確認せずにはいられない丘実ちゃんが、とびきりの1日を過ごせるよう一緒に楽しんでこようと思います。

養護メモ

102

家族に関わる その2

菅原 哲男

この国は、児童福祉法の目的やその制定に関わった人々の理想とは乖離して、その法によって制度化された児童養護施設は戦後の戦災孤児や浮浪児と呼ばれた子どもたちの処理を目的にして、丸投げに近い状態でやってきた。

だから、戦災が冠になろうがそれがとれようが、「孤児」を保護収容するという文脈の中にその「家族」と関わることを想定していなかったのは理の当然なのである。したがって、この五〇余年間にわたって、児童養護施設がそこに暮らす子どもたちのために家族に関わることを違法としてきたのである。違法と言うよりは想定していなかっただけで、制度化されていなかっただけなのである。

ところが、これがお役人にとっては問題になるのである。制度のどこにも記載されていないことどもに、たかが児童養護施設の指導員ごときが関わることも許せない。特にそれをお役目としてきていた福祉司たちには、自分がその責務をこなしているかどうかよりも、接近する領域であることでそこに踏み込まれること

を無念などの思いが生成されて、更にそれが許せなくなるのである。神奈川県でも行き違いは数件あつたが、埼玉県ではつるし上げに等しい取り扱いを児童相談所職員たちから受けたこともあるほどである。何の法的根拠を持たない専門家でもない光の

子どもの家の職員が家庭訪問を繰り返して、来訪した家族と関わり続けることは、彼らの縄張りを荒らす無法者と映ったに違いないのである。

しかし、さすがに、戦災孤児対策の収容保護をそのままに半世紀を過ぎたことに何らかの呵責の念を持つ心ある中央省庁の人々がいた。彼らの力によってなされた一九九七年改正児童福祉法に、自立支援が加えられ、家族に関わることを児童養護施設の責務としたのであつた。

また、二〇〇四年度からは、ファミリーケースワーカーが各児童養護施設に配置されたことは前述した。これによってなされる家族関係への取り組みが、合理主義や効果のみを求めてするものではなく、家族というものが持つあらゆる要因を含んだことどもとの取り組みであることも

確認しておかなければならない。家族に関わることで得られたもののプラスとマイナスを集めて相殺すると、大きなマイナスが残ることは珍しくはないのである。児童養護施設を利用するに至った家族の状況を概観することでそれへの理解が図られるだろう。

二〇〇四年現在二万八千人余の子どもたちがこの国の児童養護施設を利用しているのである。どんなに甘く見ても社会的自立を未だに果たしていないという意味で、二〇歳未満を総児童人口数にとらえることが出来るだろう。二〇〇三年一〇月現在の未成年の総数が約二千五百万人（総務省統計局二〇〇四年三月発表人口推計）という。〇・一％強という数字は、全体から見ると無視してもいい数値であるのだ。児童養護施設利用者の社会的地位は無視してもいいほどの位置に偏っていることが理解されるだろう。

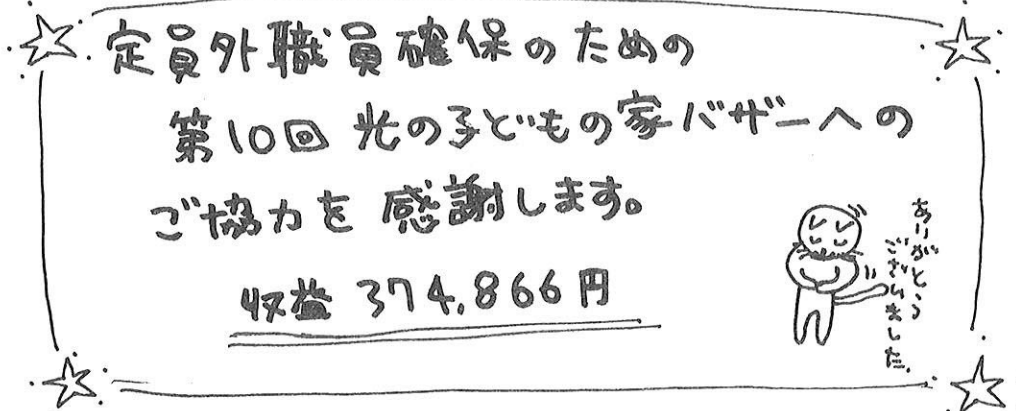
私たちが育ってきた家庭を顧みるならば、その家庭における生活のプロセスで危機的な状況が数回はあつたことをほとんど誰でもが記憶しているだろう。

シービーが二〇代から五〇代の主流階級に属する平均的で健康な一五名のアメリカ人との面接調査の結果

果を分析して発表した『パッセージ』は、アメリカ的に成功し人生危機とは無関係と思われるような人たちに、相当な危機的状況があつたことを報告し、ベストセラーとなったことは記憶に新しいことである。そんな時私たちは不安に陥り恐怖さえ感じるものがあつただろうが、しかし、児童養護施設に入れられるかもしれない、という不安を一度も経験してはこなかったのではないだろうか。

通常の生活者の位置からそれほど偏りがあることを、児童養護施設の利用者と全体との比率から理解することが出来るのである。この位置から、普遍といわれる位置への差をどう乗り越えていくのかが児童養護施設で図られる子どもの社会的自立なのである。だから、家族と関わればいいのでは決していないのである。

家族がもたらした位置と普通といわれる社会的地位の差を確認し、その克服は決して容易ではなく、子どもがその生をかけてでも果たすことが出来るかどうか不確定なほど困難を極めるものなのである。だから、その差を乗り越えるための不退転の決意とたゆまない意志を子どもとともに持ち続けていかなければならないのである。（この項続く）



日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 = 4月1日▶平成16年5月末日

2004年4月1日

幼児10名小学生13名中学生8名高校生6名措置外4名
計41名

○ 平川光子調理師 田中要一指導員就任

5日 進級進学祝い ピカピカの制服、ランドセル、カバンを持って誇らしげに そして楽しく

8日 大利根町立原道小学校へ2名、大利根中学校へ3名、埼玉県立不動岡誠和高校へ1名がそれぞれ入学式

10日 大利根藤幼稚園入園式、進級式
入園1名進級4名

17日 菅原施設長福山市保育士職員研修にて講演

25日 大妻女子大学伊東教授 小学生グループが第19回子どもまつり参加する作品のゲルニカの製作を熱くご指導の一日

27日 横浜市児童養護施設旭児童ホーム内海臨床心理士ご来訪、宿泊

30日 職員のメンタルヘルス担当の角張臨床心理士来訪
<4月分物品ご寄贈者>

山北直美 井上洋子 川島由佳 杉山和俊 大塚東一
新井大和 若柳雅雅 (株)三国コカ・コーラ 丸山の各位様
5月

1日 仙道家・佐藤家・市川家・倉澤家各々お楽しみの外出へ

4日 第19回子どもまつり クラスメートやご家族、学校の教師やボランティア、それに社会人になった者たちや元職員など100余名が参集して おいしく 楽しくにぎやかに

5日 後援会役員会

6日 菅原施設長カリフォルニア大学のインターン制度検討会議と留学している萌季を訪ねてアメリカに

11日 大利根中学校教師との懇談会

○ 原道小学校家庭訪問開始

12日 後援会、赤十字奉仕団構内整備ご奉仕 感謝

16日 東大宮教会教会学校教師との懇談会

19日 光の子どもの家第10回定員外職員確保のためのバザー打ち合わせ会議

20日 田村さん散髪奉仕

22日 聖学院大学ボランティア24名来訪

26日 後援会総会 島田大利根町町長などをご来賓としてご参加いただき盛大に

27日 第74回理事会 事業報告案及び決算案など承認

<5月分物品寄贈者>

嶺澄子 (株)テクノ 駒宮幸次 小川典子 村田かよ子 鈴木重義 神田幸枝 田代あつ子 角尾和子 野澤とも子 東洋英和女子学院小学部 藤本曜子 須田美奈子 栗橋ガールスカウト 豊国 加藤美代子 仲谷 菊池 佐藤 黒田 古川景子 添田貞昭の各位様 感謝してご報告します。(くら)

/// ———— [反] [射] [光] ———— ///

☆梅雨入前に台風が来て季節の変調を知らされます☆家族が離散し見も知らない場所ですれまで何の関わりもない人々と暮らさなければならぬ子どもたちの数は増えても減りません☆この国の道筋が狂っていると思えない事件が子どもによって引き起こされ続けます☆事件の処理に目を奪われず、子どもたちが無意識のうちに自らを犠牲にして訴える、大人たちが自らを省み正さなければならぬことに目を向けるべきだろう☆子どもたちの状況が劣化しているのは大人の関係、家族関係がそうだからです☆断言できるのは、酷い状況に置かれた子どもたちの示す大人への敵意、不信と暴力が表現の全てだったものが、自壊寸前の危機的な状況に至るまでその敵意や憎悪を抱きしめて温め続ける保育士・指導員たちの継続的な関わりの中で、反転し豊かな愛らしい表現・表情に激変する子どもたちが光の子どもの家の日常だからです☆そのような関わりを継続的に提供出来そうですより更に励みます。(哲)